

荻野吟子

人 その友のためにこれの命を損つるは

是より大なる愛はなし



<話しの内容>

1. 荻野吟子の誕生
2. 女医への決意
3. 女医への苦難の道
4. 医術開業試験に初めて女性が合格
5. 女性の権利確立を目指して
6. 志方との再婚そして渡道4.

荻野吟子の誕生

- 荻野吟子は、嘉永4年(1851)3月3日、現在の妻沼町の名家に、父綾三郎、母嘉与の5女として生まれました。
- 吟子の父は、我が子や村の青年たちのために講師を招いて学問を講じてもらっていましたが、兄たちがあまり熱心でなかったのに対して、幼い吟子は学問好きのたいへん利発な子でした。
- 13歳の時に、近くの大竜寺の住職北条察源が開設した「行余書院」という寺子屋で基礎教育を受けた後、17歳の時には、儒学者の寺門静軒が開設した「両宜塾」で松本万年に師事しました。ここで吟子の学問の才能が開花し、ますます向学心を培っていきました。



吟子の生家



寺門静軒

女医への決意

- 吟子は学問の師である松本万年が「眼千両」と賞賛するほどの成長ぶりでした。
- そして、慶応4年(1868)、吟子は村人の羨望を一身に集めて、北埼玉郡上川上村(現在の熊谷市)の名主、稲村貫一郎と結婚しました。
- ところが、不慮の病(淋病)に冒され、2年後の明治3年に離婚し、松本万年の勧めで東京の病院(順天堂病院)に入院しました。
- このとき、男性の医師に治療を受けた際の耐え難いまでの羞恥、屈辱感が、吟子に女医の必要性を痛感させ、自ら医師となる決意をさせたと伝えられています。



吟子の嫁入り



新旧の順天堂大学

女医への苦難の道

- 当時の日本では、女性が医者になるなどおよそ考えられない時代でした。ましてや、医学校への女性の入学など認められるはずありませんでしたので、吟子は、明治8年(1875)、この年に開校したばかりの東京女子師範学校(後のお茶の水女子大学)に入学、同12年に卒業しました。
- その後、女医の必要性を訴える吟子の熱意が関係者を動かし、私立医学校「好寿院」への入学を果たしました。
- 好寿院では、女性への偏見と闘い、また家庭教師を続け苦学しながら、同15年、優秀な成績で卒業しました。しかし、医術開業試験の願書を東京府庁や埼玉県庁に何度提出しても、女性であるがゆえに却下されてしまいました。吟子は諦めませんでした。



東京女子師範学校



医学校「好寿院」



医術開業試験に女性で初めて合格

- ある日、いよいよ吟子は、規則改正を求めて内務省衛生局長への面会を果たしました。その時、「令義解」という古文書に女医の記述があることを訴えたといわれています。この「令義解(りょうのぎげ)」を校訂し、後世に引き継いだ人が、埼玉の偉人、塙保己一でした。塙保己一は、吟子が医者になることを手助けしたと言えるでしょう。
- こうした吟子の女医への熱い思いが通じ、ついに明治17年(1884)に内務省医術開業試験規則が改正されました。その第1回目の前期試験には吟子を含め4人の女性が受験しましたが、合格したのは吟子だけでした。そしてよく18年3月の後期試験にも合格し、吟子35歳の時に、日本で最初の女性医師となりました。
- 吟子は、明治18年5月、本郷湯島三組町に念願の「産婦人科 荻野医院」を開業しました。当時の新聞や雑誌はこの開業の報道に紙面を惜しまなかったため、一躍脚光を浴びました。

—「荻原吟子博物館」展示物より引用—



令義解

吟子 開業の地の
カンバン



女性の権利確立を目指して

- 吟子は、診察を続けるうちに、患者の背景に貧困や社会習慣等の問題を感じ、明治19年(1886)にキリスト教に入信しました。
- 同年、万国キリスト教婦人矯風会普及のために来日したアメリカのレヴェッツ女史の演説を聞いたことがきっかけとなり、東京婦人矯風会の結成に参加しました。吟子は、その風俗部長に就任し、婦人覚醒運動や婦人参政権運動などの社会的活動を開始しました。
- 中でも、明治23年公布の「集会及び結社法」に婦人の議会傍聴を認めないという条項があったため、「婦人議会傍聴禁止に対する陳情書」を作成し、これを撤回させる運動を繰り広げた結果、婦人の議会傍聴が許されることになりました。
- 婦人団体の政治運動が功を奏した最初の出来事として、その意義は特筆に価する画期的なものでした。



レヴェッツ女史と
矯風会



婦人運動

志方との再婚そして渡道

- 明治23年(1890)、青年牧師志方之善と巡り合い、吟子40歳、志方27歳の時、周囲の反対をおして結婚しました。
- ところが、結婚してからわずか半年足らずで、夫が、キリスト教徒による理想郷建設を志して北海道に渡ってしまいました。
- 寂 の日々を送る中にも吟子は、「女学雑誌」に「本邦女医の由来乃其前途」という生涯唯一といわれる論文を発表しています。
- その後、吟子は、夫に協力するため、同27年にイマヌエル(今金町)に入植しましたが、理想郷建設は思うように進まず、同30年、現在の瀬棚町に移り、医院を開業しました。
- 同38年、夫が肺炎のため42歳で急逝。吟子は、同41年に帰京し、本所区新小梅町に医院を開業し晩年を送り、大正2年(1913)6月、波乱に満ちた63歳の生涯を閉じました。

—「荻原吟子博物館」展示物より引用—



北海道の生活(一粒の麦より)

